

『立山曼荼羅 [坪井龍童氏本]』について

福江 充*

はじめに

『立山曼荼羅 [坪井龍童氏本]』の発見は、所蔵者の坪井龍童氏（名古屋市在住）が、北アルプスの立山を訪れた際、当地の山荘で立山曼荼羅の写真を目にされ、氏が自宅に所蔵する軸装の絵図も、その内容から、おそらく同種類のものと同種と確信されたことに端を発する。

後日、山荘から、こうした情報が立山博物館建設準備室に寄せられ、時を経ずして、坪井氏より氏所蔵の絵図の写真とビデオ映像を御送付いただいた。そして、我々博物館建設準備室の学芸スタッフは、その図像内容から、坪井氏所蔵の絵図が芦峯寺系の立山曼荼羅であることを確認したのである。

本稿では、この立山曼荼羅が、現在、坪井家につたわる理由を明らかにし、さらに、その画面構成や図像内容について紹介を試みたい。

1 形態について

[坪井龍童氏本] は、紙本着色で4幅ものの軸装された絵図である。4幅を掛け合わせたときの大きさは、外寸が縦210cm×横190cm、内寸が縦180cm×横186cmである。各幅ともに、マクリの部分は次のように紙継ぎがなされている。

縦93.5cm×横 13.5cm 2枚

縦93.5cm×横12.15cm 4枚

縦93.5cm×横 10.8cm 2枚

縦93.5cm×横31.05cm 6枚

縦93.5cm×横17.55cm 2枚

各幅の裏面上部に「立山繪傳 一」、「立山繪傳 二」といった具合に幅番号が記され、[坪井龍童氏本]が立山繪傳と呼称されていたことや、画面に向かって左端の幅から順に、第1幅から第4幅までを数えていたことが窺われる。

* 富山県 [立山博物館]

この〔坪井龍童氏本〕には裏書が見られる。まず、第4幅に龍測という僧侶が記す裏書が、そして、第3幅から第1幅に檀那場名及び世話人名、施主名が記されている。

2 龍測自筆の裏書について

2.1 裏書の内容

第4幅には、龍測が記す次のような裏書が見られる。

此四軸者、立山芦峯寺教順坊什物之古画、雖在庫蔵、悉皆破損地紙乱雑、有旧跡拜見、末分所函一列、紙調理之、且指加、拙老之了察以示、画工飛陽蘭江齊彩筆之、予累年諸洲遊行之間、善男子善女人等、財施食施信施可候、供恩令抑報謝、此微善之功力願後、賢拝覧之時、光明真言一遍阿弥陀念佛十声乞唱誦者也、寄附教順密坊化他引住侶了

生国淡州三原郡松帆浦櫛田、倉本十五代曾孫同苗忠左衛門廣信之二男、而出家、同所五大力山遍照院願海秘密一乘寺寺成立也、志学之翌夏之頃、一心決定速登嶺高野、学侶入衆、十八年在山、学席之階登勸学院、勸席講演之座也、然所、依テ随師碩学命、不得辞、則加賀金城下向、遂五ヶ年留錫以、終二十餘之大願成滿、暨加陽越中数ヶ之再営致之、立山大隠行者数十年、天保元年八尾宿開山、蒙於国命公廳本寺本山勸許、長栄山宝幢密寺草創開且龍測（花押）

上記の裏書きの内容構成を見ていくと、前半部分には、この立山曼荼羅の由来が記され、後半部分には龍測の経歴が記されている。

□前半部分

この4軸（現〔坪井龍童氏本〕）は、もと教順坊が所蔵していた古画であった。蔵の中に保管してあったとはいえ破損が甚だしいので、龍測がこの古画を教順坊より貰受け、修復を試みた。その際、龍測は傷んだ部分の図柄を推察し、画工飛陽蘭江齊に補筆させている。

□後半部分

龍測は諸州を遊行し、庶民に対し布施行と光明真言や阿弥陀念仏を主体とする念仏行を行った。

龍測は淡路国・三原郡・松帆浦・櫛田の出身で、倉本氏15代忠左衛門廣信の次男として生まれた。出家して、地元櫛田村の五大力山遍照院願海秘密一乘寺に入寺したが、

志しが高く、翌夏、願海寺を離れ高野山に登った。高野山では、勸学院で新衆席を勤めたりもしながら18年間滞在した。そうした折、師匠からの命を断れず、加賀藩金沢城に下向した。金沢城には5年間滞在し、10余りの大願を成就した。さらに加賀・越中で寺院の再営を行った。立山での隠遁行は10年を数えた。天保元（1830）年、国命本寺本山勅許を得て、長栄山宝幢密寺を草創し、八尾の宿に開山した。

2.2 龍淵について

上記の裏書の内容から、[坪井龍童氏本]が龍淵の指示に基づき、絵師によって補筆されていることが窺われる。それゆえ、この曼荼羅の画面構成や図像内容を読み解くには、この曼荼羅に手を加えた龍淵の性格を探る必要がある。また、龍淵の行実から、この曼荼羅が補筆された時期を推測することができる。

龍淵の人物や行実については、富山県婦負郡八尾町に所在する真言宗宝幢寺の過去帳や、芦峯寺の古文書などから窺い知ることができる¹⁾。

龍淵（1772～1837）は、もと高野山の学侶で、当山に18年間滞在し、その間、天徳院や勸学院で学んでいた。後に師匠の命により高野山を離山、加賀藩金沢城に下向し天徳院と加賀藩を結ぶパイプ役として活躍した。

文政6（1823）年から芦峯寺に庵を構えて定住し始め、当地に6年間滞在したが、文政12（1829）年に、八尾に真言宗宝幢寺を開寺させるべく移住した。天保元（1830）年の開寺以後も宝幢寺に留まり、第2世住職として寺院の運営にあたった、そして天保8年（1837）、同寺で没している。

龍淵は、芦峯寺滞在中にはもちろんのこと、八尾に移住してからも芦峯寺一山に多大な影響を及ぼしている。すなわち、芦峯寺一山が対外問題をかかえ困窮する度に、常に芦峯寺側に助力し、事態を芦峯寺側に有利に解決させているのである。

このように、芦峯寺一山に対して顧問弁護士的な役割を果たしていた龍淵は、文政末期にみられる芦峯寺の布橋灌頂会の儀式内容の変化にも、深く関与していたと考えられる²⁾。

文政末期に、龍淵のアドバイスで芦峯寺一山は、以前から行ってきた橋（布橋）渡しの逆修儀礼に、真言宗の結縁灌頂の思想を取り込み、閻魔堂での三摩耶戒の儀式や、媼堂での参詣者への血脈授与の儀式などを整備し、より完成度の高い法会に構築したと考えられる。そして、その法会は、「灌頂」の思想を意識して、おそらくは龍淵によって「布橋灌頂会」と名付けられたのであろう。

2.3 補筆された時期について

裏書に、龍淵が絵師に曼荼羅の補筆を行かせたこととともに、天保元（1830）年に、

八尾の真言宗宝幢寺を草創し開寺したことを記しているので、補筆の時期は天保元年以降といえる。

さらに、龍淵は天保8(1837)年に宝幢寺で没しているので³⁾、補筆の時期は、天保元(1830)年以降、天保8(1837)年までの間である。そうすると、補筆以前の原図の成立時期は、少なくともそれより数10年は遡ろう。

3 裏書に見られる檀那場名、世話人名、施主名について

3.1 芦峯寺の日光坊と坪井家の関係

芦峯寺の各宿坊の衆徒は、毎年、秋から翌春にかけての農閑期に全国の檀那場に赴き、配札や立山曼荼羅の絵解きによって立山信仰を布教し、勧進活動を行った。

さて、現在名古屋市に所在する坪井家(当主一坪井龍童氏)の本家(当主一坪井義昭氏)には、尾張国を廻檀配札していた芦峯寺の日光坊が訪れていたことが、同坊の檀那場帳⁴⁾から確認できる。それには、現在の坪井家当主龍童氏(龍童氏は分家された)の祖父「坪井政蔵」の名前が「宿」の註記とともに記されており⁵⁾、坪井家の本家が日光坊の檀那で、しかも同坊の宿泊家を担っていたことが窺われる。

また、坪井氏自身、幼少の頃の記憶として、叔父が坪井本家の当主の代に、本家によく白装束の衆徒が訪れていたことをなんとなく覚えているという。

こうした事実を整理して考えると、[坪井龍童氏本]は、日光坊の歴代の衆徒が毎年廻檀配札の際、立山信仰の内容を説明するために使用していた立山曼荼羅を檀那家に預け置いていたもので、後に、立山信仰の衰退で廻檀配札が行われなくなり、檀那家に残されたままになったのであろう。

3.2 芦峯寺の日光坊の尾張国における檀那場について

日光坊の檀那場帳⁶⁾には檀那場として、愛知郡では坪井家の所在する烏森村や牧野、知多郡では常滑町字北条や瀬木、熱田新町などの村名が記載されている。また、[坪井龍童氏本]の裏書にも、次のように、檀那場名や世話人名、施主名などが記載されている。

尾張国知多郡	岡田村
世話人	竹内治郎平
	竹内犬右エ門
世話人	竹内仁右エ門
	竹内仁太郎

竹内庄右エ門

竹内亀重

竹内只右エ門

尾張国海東郡大字堀ノ内村

禪海透□ 信士俗名 平松半左衛門

明治三十九年二月四日

正覚了逸信士 俗名 平松正逸

明治二十一年六月四日

影□□子

嘉永四年十一月七日

施主 平松半七

大字 牧野村

牧野重蔵

海東郡字砂子村

春日光辰信士 施主 高取徳右衛門

尾張国知多郡大野

八代目 杉山武兵衛

尾張国知多郡多屋村

井上嘉兵衛等

尾張国知多郡多屋村

井上嘉右エ門

尾張国知多郡多屋村

杉江トク女

知多郡常滑町

肥田竹三郎

知多郡樽水村

稲垣利助

武豊港

加藤ウメ

糸山フジ

知多郡古場

後藤隆三

知多郡鍛冶屋村

施主 青木忠右エ門

月戌子

忠光妙栄大師

玉堂貞光大師

尾張国知多郡犬山新田

早川長之助

早川清蔵

蟹江邦太郎

蟹石田百太郎

〃 実太郎

〃 源次郎

山口甚太郎

房次郎

久野忠兵衛

〃 文助

〃 愁助

〃 藤之助

〃 清左エ門

早川辰次郎

〃 長三郎

嶋政之助

芳三郎

九右エ門

鈴木支蔵

名和村

小嶋奥右衛門

犬山新田
早川喜久次郎

名古屋市門前町
三丁目 黒宮武平
全 江川町
松川口治郎
全北 祢宜町十貳番地
安井銀治郎

上記のように [坪井龍童氏本] の裏書には、知多郡の岡田村、大野、多屋村、常滑町、樽水村、武豊港、古場、鍛冶屋村、犬山新田、名和村などの村名が、また海東郡の堀之内村、砂子村などの村名が記載されている。

こうした内容から、愛知郡や知多郡、海東郡といった伊勢湾沿岸地域は、芦峯寺の日光坊にとって、尾張国における檀那場の中でも信徒も多く⁷⁾、比較的重要な地域であったようである。

3.3 常滑を訪れた龍測

日光坊所蔵の『立山本地阿弥陀如来畧記』の末尾の添書⁸⁾によると、龍測は芦峯寺滞在中に、日光坊の弘徹を世話人として尾張国常滑に赴き、当地の西山浄土宗正住院で開かれた専阿⁹⁾を囲む集会で講義を行っている。

当時、正住院で隠居していた専阿は、浄土宗の高僧でありながら、その宗教活動に隠遁性や念仏行者的性格、遊行性をみせる、いわゆる浄土宗捨世派の系譜に属する人物である。

さて、日光坊の歴代衆徒は尾張国を諸国配札の担当地域とし、正住院の所在する知多郡常滑にも毎年廻檀していた¹⁰⁾。そうした中で、日光坊の弘徹は、正住院の専阿に出会ったと考えられる。

後に、専阿をかこんで集会が催されることになった。おそらくその集会は、阿弥陀仏の札所、すなわち西方四十八願所の選定にかかわる集会であったと考えられるが¹¹⁾、その際、弘徹が、高野山での学侶生活の経験を有する龍測を、学問的には専阿にもひけをとらぬ人物と見込み、講師として専阿に紹介したのであろう。

ところで、専阿が文政6（1823）年から阿弥陀仏の札所、すなわち西方四十八願所

の選定を行ったことは前にもふれたが、その詳細を記す『弥陀霊像西方四十八願縁起』全4巻のうち第3巻に、「越中立山蘆嶮寺」を西方四十八願所の遠国霊場の一箇所としてあげている¹²⁾。

これについては、専阿が、自坊の所在する尾張国知多郡常滑に毎年廻檀配札に訪れていた日光坊の弘巖あたりから、立山信仰の内容を聞き知り、西方四十八願所の遠国霊場として「越中立山蘆嶮寺」を加えたものであろう。

こうした日光坊の弘巖と専阿の交流が基盤となり、正住院での龍淵の講義が実現したのである。

さてこのように、日光坊の弘巖と龍淵の間には接点が見られ、連れだって尾張国を訪れる機会も何度かあったと考えられる。坪井家に残された立山曼荼羅は、そうした際に龍淵が自分の所蔵する立山曼荼羅を坪井本家に預け置きしておいたものか、あるいは、龍淵の没後、彼と親交の深かった日光坊の弘巖が、この立山曼荼羅を貰受け、坪井本家に預け置き、廻檀布教の際、絵解きに使用していたのであろう。それが、立山信仰の衰退で廻檀配札が行われなくなり、坪井家に残されたままとなり、さらに近年、坪井本家から坪井家（分家）に移り、現在に至っていると考えたい。

4 画面構成と図像内容について

画面構成と図像内容については図1を参照のこと。

4.1 描き込まれた図像の種類

《立山開山伝説》

- (1) 佐伯有頼が手負いの熊を追いかける場面（その上部には白鷹）
- (2) 玉殿の窟の場面（矢疵阿弥陀如来と不動明王、ひれ伏す佐伯有頼）

《立山地獄》

- (3) 針の山（上部には姫）
- (4) 浄玻璃鏡
- (5) 業秤
- (6) 火の車
- (7) 亡者の舌を引き抜く鬼
- (8) 無間地獄（火炎地獄）
- (9) 衆合地獄（杵と臼）
- (10) 石材と石材の間に亡者を挟みハンマーで叩きつける鬼（岩として塗り潰されて

いる)

- (11) 目連尊者と串刺しの母
- (12) 血の池地獄、
- (13) 大施餓鬼法要会
- (14) 賽の河原
- (15) 石女地獄
- (16) 両婦地獄
- (17) 修羅道
- (18) 畜生道 (山として塗り潰されている)
- (19) 森尻の智明坊 (山として塗り潰されている)
- (20) 餓鬼道 (山として塗り潰されている)
- (21) 地獄の釜

《立山浄土》

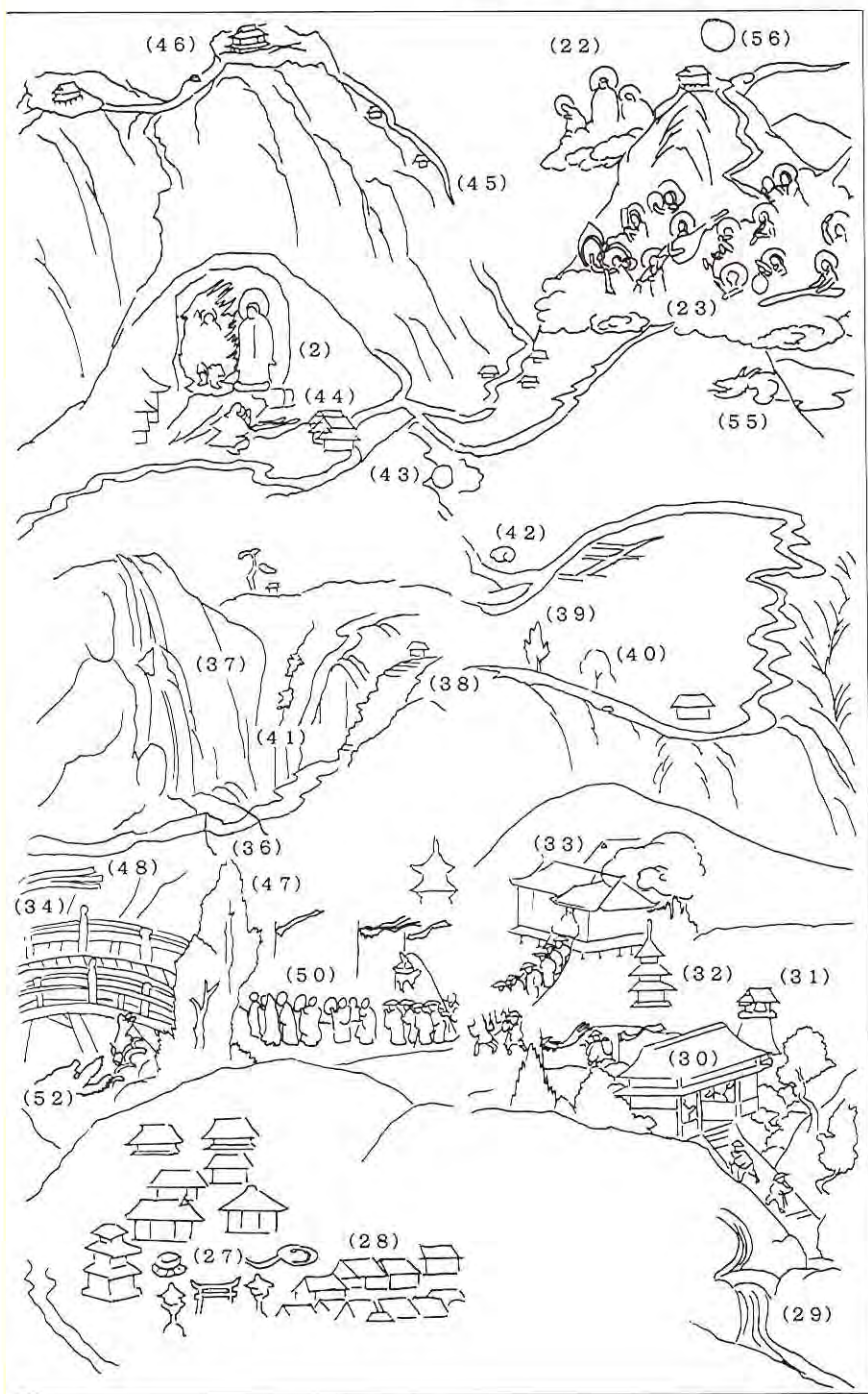
- (22) 阿弥陀如来の三尊来迎
- (23) 諸菩薩の来迎
- (24) 飛天

《立山禅定登山案内》

- (25) 布施城
- (26) 岩岫寺の堂舎 (鳥居、湯釜を含む)
- (27) 芦岫寺の堂舎 (鳥居、灯籠、三重塔、湯釜を含む)
- (28) 芦岫寺の宿坊
- (29) 玉橋
- (30) 仁王門
- (31) 鐘楼堂
- (32) 三重塔
- (33) 閻魔堂
- (34) 布橋
- (35) 媼堂
- (36) 藤橋
- (37) 称名滝
- (38) 材木坂
- (39) 美女杉



図1 立山曼荼羅 [坪井龍童氏本] の画面構成と図像内容



- (40) 禿杉
- (41) 一の谷
- (42) 媯石
- (43) 鏡石
- (44) 室堂
- (45) 一の越～五の越

(番外) 峰本社、各山頂への登拝道(雄山・大汝山、富士の折立、別山、浄土山)と
山頂の堂舎

《布橋灌頂会》

- (33) 閻魔堂(堂内に閻魔王のみを描く)
- (35) 媯堂(堂内に多数の媯尊を描く)
- (34) 布橋
- (47) 四本杉
- (48) 四方幡
- (49) 白布(閻魔堂から布橋を経て媯堂まで)
- (50) 引導師及びその他の式衆と女性の参詣者
- (51) 来迎師及びその他の式衆
- (52) 布橋から転落する女性と、それを待ちうける籠
- (53) 影向石(柵のみ)
- (54) 衣柳樹の下に奪衣婆と衣服を剥ぎ取られる女性、

《その他》

- (55) 刈込池とその中に籠(籠と池の半分は山で塗り潰されている)
- (56) 日輪
- (57) 月輪

(番外) 各所に参詣者

4.2 画面構成と図像の特徴

[坪井籠童氏本]には、いたるところに補筆の跡がみられる。特に、地獄の場面については、例えば、畜生道、森尻の智明坊、餓鬼道、石材と石材の間に亡者を挟みハンマーで叩きつける鬼などが、山や岩の描写で塗り潰され、他の芦峯寺系の立山曼荼羅と比べると、地獄の場面のスペースは、幾分ひかえめに感じられる。

それに対して、布橋灌頂会の儀式の場面は大きくスペースを割いて強調して描かれている。補筆の箇所が最も多いのは、この布橋灌頂会の場面で、媯堂や閻魔堂の建物、

白布の筵道などが書き直され、さらに女性の参詣者の後列は、新たに書き加えられている。

立山登拝路は、綴れ織りには描かれているけれども、実際に登拝する際の行程に基づいて正確に描かれている。この図柄を指示した龍涑は、実際に立山に登拝したことがあるのであろう。浄土山の頂上の堂舎へも参詣路が描かれており、興味深い。

地獄の場面の図像は、元禄期の成立とされる〔来迎寺本〕にみられる図像と共通するものが多く、それに対して近世幕末期頃の成立と考えられる〔善道坊本〕や〔大仙坊A本〕、〔相真坊B本〕、〔筒井氏本〕などの作品に見られる図像とは、若干趣を異ならせている¹³⁾。

具体的に指摘すると、〔坪井龍童氏本〕に描かれた衆合地獄(杵と臼)や石材と石材の間に亡者を挟みハンマーで叩きつける鬼、大施餓鬼法要会などの図像は、〔来迎寺本〕と同様、比較的古い図像形態といえよう。また、〔来迎寺本〕と〔坪井龍童氏本〕には、浄玻璃鏡や業秤は描かれているが閻魔王と冥官が描かれておらず、閻魔王庁を強調して描く〔善道坊本〕や〔大仙坊A本〕などの作品とは異なりを見せている。

4.3 布橋灌頂会の場面の構図・図像から

〔坪井龍童氏本〕の補筆後の画像においては、布橋灌頂会の儀式の場面に大きくスペースが割かれており、とりわけ強調して描かれている。そして、実は、龍涑による補筆は、特にこの部分に力が注がれている。そうした龍涑の意識の根底には、前節で指摘したような、龍涑と布橋灌頂会の儀式との関係¹⁴⁾が見え隠れしているのである。

4.3.1 布橋灌頂会の場面で、閻魔堂での儀式が描かれない〔来迎寺本〕について

〔坪井龍童氏本〕に描かれた布橋灌頂会の場面と共通した構図を有する作品に、元禄期に製作されたと推定され、現存する立山曼荼羅のうち最古の作品である立山曼荼羅〔来迎寺本〕があげられるが、〔坪井龍童氏本〕に描かれた布橋灌頂会の場面を分析する際には、この〔来迎寺本〕との比較検討は重要な意味を有する。それゆえ、まず最初に、〔来迎寺本〕に描かれた布橋灌頂会の場面を分析していきたい。

〔来迎寺本〕の布橋灌頂会の場面を、他の芦峯寺系の立山曼荼羅の同場面と比較すると、いくつかの点で差異が窺われるので、それについて以下指摘する。

まず、〔来迎寺本〕では、媼堂と閻魔堂の配置が他の立山曼荼羅にみられる配置とは逆である。具体的に見ていくと、媼堂は第1幅の画面の中心やや下部に、布橋は第1幅の画面の中心やや下部の右端から第2幅の画面の中心やや下部にかけて、閻魔堂は第3幅の画面の中心やや下部の左端に描かれている。

儀式は画面に向かって右から左へと進行し、白布を敷き渡して作られた筵道も、布

橋上の、向かって右端から堂内へと伸びている。橋上には、女性の参列者や引導師・来迎師らの式衆がみられる。そうした中で、閻魔堂は布橋灌頂会の儀式とは全く関連せず、独立して、しかも小規模に描かれている。

さて、こうした図柄を整理して考えると、この [来迎寺本] では、布橋灌頂会の儀式は、布橋の右端から始まっており、媼堂へ向かっての橋渡りの場面に明らかに主眼がおかれているのである。そして、他の立山曼荼羅では必ず示唆されている閻魔堂での懺悔の法要は、この『来迎寺本』では全く表現されていない。

4.3.2 [坪井龍童氏本] の布橋灌頂会の場面に表れた龍涿の補筆に対する意識

前項で、成立年代が古いとされる [来迎寺本] の布橋灌頂会の場面には、閻魔堂での儀式が描かれていないことを指摘したが、龍涿によって補筆される以前の [坪井龍童氏本] の布橋灌頂会の場面においても、[来迎寺本] と同様に、閻魔堂での儀式が描かれていないことを指摘することができる。

この [坪井龍童氏本] においては、補筆される以前の図柄が透けて見えるので、もとの図柄がどのように補筆されたかを、以下、指摘したい。

まず、媼堂は、もとの図柄より若干小さく描かれている。媼堂の側壁が白壁で描き直されたため、数体の媼尊が塗り潰された。

もとの図柄では、白布を敷き渡して作られた筵道は、補筆後のそれよりかなり細いもので、媼堂前から布橋を経て、第3幅の右端に描かれた4人の女性の参列者の足元まで伸びていた。すなわち、第3幅の右端で白布の筵道は途切れていたのである。

補筆された図柄では、白布の筵道は、第4幅の左端からさらに続き、閻魔堂の閻魔王前までのびている。その上には、数人の女性の参列者がみられるが、この部分の白布の筵道も、その上を歩く参列者も補筆の際に新たに書き加えられたもので、もとの図柄にはなく、第3幅右端の女性の参列者、及びその足元の白布の筵道と比較すると、明らかに筆致が異なっている。

さらに、閻魔堂と閻魔王も書き直されており、布橋灌頂会の行事の進行にあわせて斜め向きに描かれているが、もとの図柄は、布橋灌頂会の儀式とは関係なく、ほぼ同位置に正面向きで描かれている。

こうした内容から考えると、もとの図柄では、布橋灌頂会の場面は第2幅から第3幅の間におさまっていたのである。すなわち、閻魔堂での懺悔の儀式は、[来迎寺本] の図柄と同様、原図では全く示唆されておらず、媼堂に向かって、布橋を渡るといった儀式に主眼がおかれていたのである。

以上、立山曼荼羅 [来迎寺本] と立山曼荼羅 [坪井龍童氏本 (原図)] にみられる布

橋灌頂会の図柄の共通性について指摘したが、その内容を今一度整理すると、閻魔堂での懺悔の儀式が描かれないこの2作品の布橋灌頂会の場面は、浄土教的色彩の強かった橋（布橋）渡しの逆修儀礼に、龍潤によって、真言宗の結縁灌頂の思想が取り込まれて整備される以前の、すなわち「布橋灌頂会」という完成された法会に変化していく以前の儀式の実態を表しているのである。

[教順坊本]を貰受けた龍潤は、その図柄を見て、布橋灌頂会の場面が、自分が整備する以前の古い儀式形態に基づいて描かれていることに気づいた。それで、特にその場面の補筆に力を注いだのであろう。

ところで、芦峯寺で行われていた橋渡しの逆修儀礼が法会として一応整備・完成され、さらに「布橋灌頂会」と呼称されるようになる時期は、文政末期である。

そうすると、[坪井龍童氏本（原図）]を除く現存の芦峯寺系の立山曼荼羅の全てが、その図柄に完成されて、定型化した「布橋灌頂会」の場面を有するので、これらは全て、文政末期以降に製作されたと考えられる。

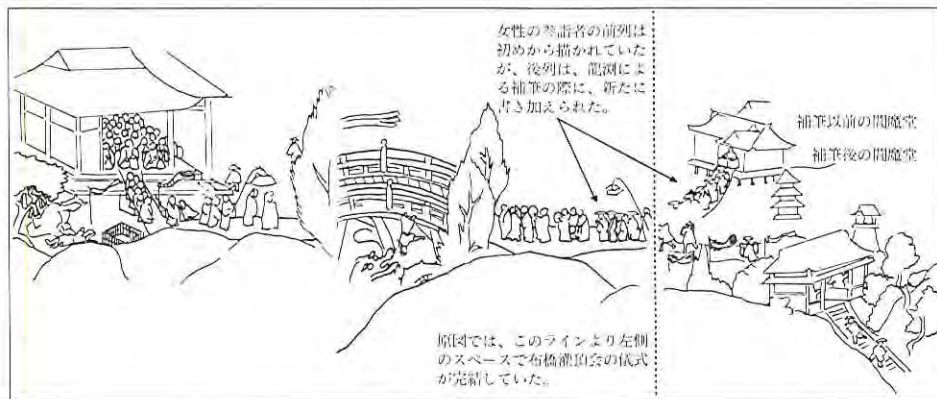


図2 立山曼荼羅 [坪井龍童氏本] の布橋灌頂会の場面

おわりに

『立山曼荼羅 [坪井龍童氏本]』はもともと芦峯寺の教順坊の立山曼荼羅であった。その後、この曼荼羅の所蔵は、教順坊から龍淵へ、龍淵から芦峯寺の日光坊へ、さらに同坊の檀那であった坪井家へと順々に移っていった。そして現在は富山県 [立山博物館] が寄託資料として坪井氏よりお預かりし、厳重に管理・保存している。

この立山曼荼羅が有する補筆以前の画面構成や図像内容は、近世幕末期頃に作成されたと考えられる [善道坊本] や [大仙坊A本]、[相真坊B本] などの芦峯寺系立山曼荼羅とは、明らかに趣を異ならせており、天保期以前の立山曼荼羅の実態を窺ううえで、非常に貴重である。

また、補筆後の画面構成や図像内容からは、補筆者である龍淵の布橋灌頂会に対する意識が窺われ興味深い。

さらに裏書からは、この立山曼荼羅の由来をはじめ、芦峯寺とゆかりの深い龍淵の人物像や芦峯寺の日光坊による諸国配札活動の一端が窺われる。

立山曼荼羅 [坪井龍童氏本] は、今後、他の立山曼荼羅諸本の調査研究及び資料的位置づけを行っていく際、補筆時期が限定できるといった点で、画面構成や図像内容を比較する場合の基準作品となりうるので、非常に資料価値が高いと考えられる。

註

- 1) 福江 充著「もと高野山の学侶龍淵の在地宗教活動(芦峯寺一山とのかかわりを中心として)」、『宗教民俗研究・第4号』(名著出版) 所収を参照。
- 2) 福江 充著「布橋灌頂会の変遷について(文政期から天保期を中心として)」、『富山史壇・第113号』所収を参照。
- 3) 富山県婦負郡八尾町に所在する、真言宗宝幢寺の過去帳に龍淵の没年が記載されている。

天保八丁酉正月六十五才死

當寺第二世中興開山阿闍梨権大僧都法印龍淵

弘全師墓一集二奉安置者也

閻魔堂(富山県中新川郡立山町芦峯寺に所在)の前庭に建つ龍淵の墓碑に没年が記載されている。

(正面)

「ア」法印龍淵墓所

本朝高祖弘法大師御真筆写

奉仏祖報恩法印龍淵建立

文政十三秋石工善名甚藏

(台石背面)

當一山中

造營之

(台石正面)

〈光明真言を横書きに刻む〉

(台石背面)

天保八丁酉年

正月十一日吉

- 4) 立山芦峯寺日光坊には、日光坊の檀那場であった尾張国における立山講社のリストを記した、表題を有しない6センチ×15センチの帳冊が残されているが、その内容から窺うことができる。
- 5) 註4) 参照。
- 6) 註4) 参照。
- 7) 註4) 参照。
- 8) 『立山本地阿弥陀如来畧記』(日光坊蔵)に添付された文面資料
- | | |
|-------------|-----|
| 常滑正住院集会 | |
| 弘巖世話記 | 日光坊 |
| 立山本地阿弥陀如来畧記 | 蔵書 |
- 弘巖は当坊六十世中興法印深秀也
当書は文政年代の記ならん
- 『立山本地阿弥陀如来畧記』(文末の部分)
- 是ハ、日本四十八阿弥陀尾洲知多郡常滑正住院隠居専阿上人御集之時、右御願付、龍淵法印御話候事にて、同墓縁弘巖御世話仕候
- 9) 『近世浄土宗の信仰と教化』所収「専阿の西方四十八願所巡拝」長谷川匡俊著、北辰堂、頁83～124参照。
- 『仏教民俗学大系 2・聖と民衆』所収「近世念仏聖の信仰と修行—浄土宗念仏信仰史の視点から」長谷川匡俊著、名著出版、頁155～172参照。
- 10) 『見聞録・弘巖書 [文化11年]』(日光坊蔵)から窺われる。

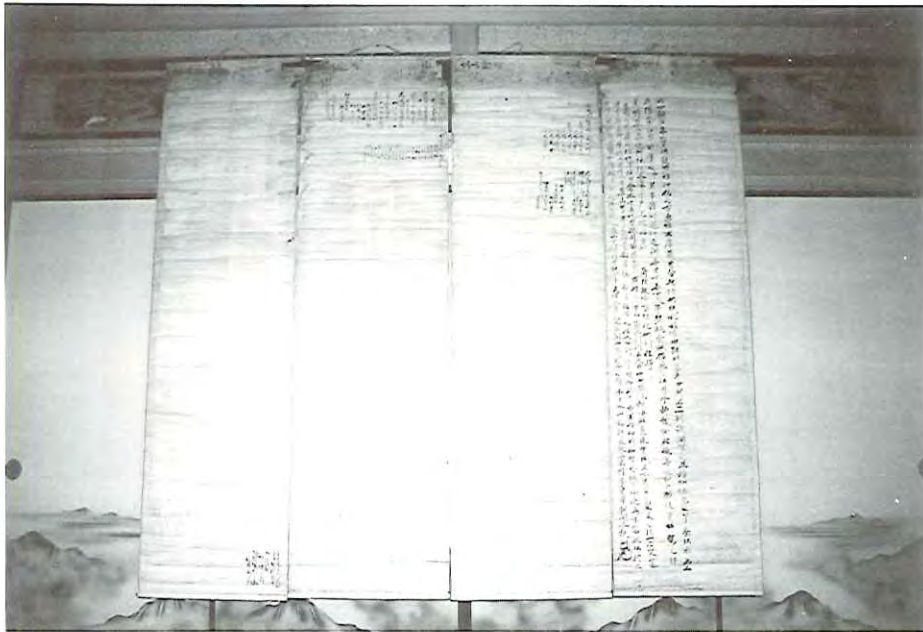
- 11) これについては、龍淵の正住院での講義をまとめた『立山本地阿弥陀如来啓記』（日光坊蔵）の内容から窺われる。
- 12) 『弥陀霊像西方四十八願縁起』第3巻
第一座之内越中立山蘆岫寺
以下立山白山富士山ノ三禅定ノ弥陀如来ヲ合シテ九躰ノ中尊トスレバ。三躰一佛と遙拝スベシ
抑當山奥ノ院秘佛阿弥陀如来ハ。人王四十二代ノ文武天皇ノ御宇。大宝年中。慈興上人ノ彫刻ナリ案ズルニ大宝辛酉年。志賀ノ京四條ノ郡主。越中守佐伯有若朝臣ノ嫡男有頼公。越中新川郡布施院ノ城ニ入玉ヒ。~~~~~
- 13) 立山曼荼羅[善道坊本]、[大仙坊A本]、[相真坊B本]、[筒井氏本]はそれぞれお互いに共通した図像を有し合い、ほぼ同時期、おそらくは近世幕末期の成立と考えられる。これらの作品に見られる図像は、元禄期の成立とされる[来迎寺本]や本稿で取り上げている[坪井龍童氏本]の図像とモチーフは共通しているものの、明らかに趣を異ならせている。
- 14) 福江 充著「布橋灌頂会の変遷について(文政期から天保期を中心として)」、『富山史壇・第113号』所収を参照。

謝 辞

本稿に掲載した図1・図2の原図作成にあたっては、佐伯明美氏の協力を得た。ここに記して深く感謝の意を表する。



1. 『立山曼荼羅 [坪井龍童氏本]』



2. 『立山曼荼羅 [坪井龍童氏本]』裏書